



1968-1974

全員で勝ち取った近畿大会初優勝



昭和48年3月、近畿大会初優勝の感激。後列左から、八木、大谷、今田、馬場、芦田、佃先生、浜田
中列左から、小見山、中村、関、成田、広瀬
前列左から、雲井、宮本、辻村、堂免、守田、岡田

いい時代に六甲で サッカーをやれた

我々31期が六甲に入学した年、昭和43年は日本サッカーの最も輝ける年であった。あのメキシコオリンピック銅メダルの年である。

世は正にサッカーブームであり、勢いからすれば昨今のJリーグ人気どころではなかった。日本リーグの黄金カード三菱対ヤンマー戦に4万人もの観衆を集め、「アマチュアのスポーツにこんなに人が集まるものか」とプロ野球をはじめとするスポーツ関係者に衝撃を与えたのだった。

このような時代背景の中で、当時、六甲の全校的スポーツはサッカーだった。狭い第1運動場の桜の木をゴールにして、中1から高3まで、休み時間になるとサッカー部以外の人間までがサッカーに熱中していた。中にはサッカー部員よりうまい者がいたりして、サッカー部員には大いに刺激になった。当時、佃先生は、「生活の中にサッカーを」と、口やかましく仰っていたが、練習とは全く違う意味で、所謂ストリートサッカー的要素が、ボールに慣れ親しむ意味でプラスになっていた。

卒業する迄の6年間、運動場の大改造、プールの新設等、設備面の改善が

行われたが、これらの全てを工夫して活用し、体力の向上に役立てたことも、見逃せない。

我々31期が中3の時の対外成績は、夏の神戸市大会準優勝が唯一の成果であり、その後の三都市大会では大阪代表にボロ負け、秋の大会でも雨中の瓦木中戦に完敗して早々に姿を消した。一週間の休みの後は29期率いる高校チームの練習に参加することとなる。振り返ると、この時期が我々の近畿大会制覇に向けてのスタートであった。

先生からは、「高校に負けん体力を作れ」と、サーキットトレーニングが命じられ、臍に怪我しながらの階段跳びなど、みんなが一生懸命に取り組ん

だ。開始当初は、通学時の坂道が異様に長く感じられた程、我々の体は出来ていなかった。中学生の体から高校生の体へ、鉄は熱いうちに叩かれたのである。

そして、29期・30期による初のインターハイ出場。我々は、幸運にもこの時同じチームにすることができた。全国大会出場決定後の短期間の集中した体力作り、プールサイドを汗だくになって何周も走ったことも体力強化に役立った。徳島での対浜名高戦は六甲サッカー史上に残る名勝負であると思うが、この全国レベルのゲームを直接肌で感じられたことも良い経験であった。

我々が高2になって最大の難問は受験問題であった。夏休みの練習を「学習」と称して高2の数名がサボり、主将の辻村が佃先生に叱責され、残りの高2は炎天下のグラウンドに正座させられるという情けないことがあった。

高2全員で話し合いの場を持ち、とにかく勉強もサッカーも両立させる方向でまがりなりにも空中分解という危機は免れたのだった。

その後、秋の神戸市新人戦を皮切りに、何故か「優勝」という二文字には縁遠いまま、冬の県大会を迎えた。ハイライトは対神戸高戦であった。前後半60分、延長20半を終えてスコアは0-0。雨中の準々決勝はついに再延長に突入したのである。エースの宮本をゲーム中の負傷で欠きながらも、32期の頑張りもあって今田の決勝ゴールで2-1の勝利としたのである。

初春の京都での近畿大会。旅館に泊まったのは1回戦の前日だけ。後は自宅から西京極へ通うということになった。コンディション作りの点でこれは佃先生の名采配だった。

2回戦の対京都商戦、優勝候補を相手に、堂免、浜田のゴールで辛勝。準決勝の対甲賀高戦は、全国大会の常連を相手に、大谷のミラクルゴールで先制、追いつかれての抽選勝ちであった。今までくじに弱かった我々にとってついに運は巡って来た。

決勝は対嵯峨野高戦。今までゴールを守った広瀬に代わって、正GKの雲



昭和47年3月、30期と共に近畿大会に臨む。和気あいの初戦前夜。(琵琶湖畔のホテルにて)



中学2年の頃の冬の練習。

井が負傷癒えて初出場。しかし、ストッパーの浜田が甲賀戦で負傷、スタメン出場できず、守備面で若干の不安を残してのスタートであった。しかし、GK雲井は勿論、辻村、中村、関のBK陣、成田、宮本、小見山のHB陣、CFの今田までもが体を張って守った。後半20分すぎ中村の右CKを守田がヘディングシュート、見事に決勝ゴールとなり、その後も守り抜いてついにタイムアップ。数十名の同級生、先

輩、後輩の応援にも力づけられた決勝戦であり、全員の力で勝ち取った初優勝であった。主務として頑張ってくれた岡田、寺井、縁の下の力持ち的存在であった島津らの貢献も、我々のチームに欠かせないものであった。

あれから丁度20年が過ぎ、当時を思うと、「俺達はいいい時代に六甲でサッカーをやれたんだな」と思わずにいられない。

[浜田 慎豪]